

# 平賀源内『神靈矢口渡』について

— 福内鬼外論序説 —

福田安典

坪内逍遙の『小説神髓』（明治十八年、松月堂）に次の有名な一節がある（傍線筆者）。

勸懲小説は英語にては「ダイダクチツクノベル」と称して専ら奨誠を主眼として人物を仮作り、脚色を構へて世を諷刺せんとつとむる者なり。曲亭馬琴以後の著作は概ね此種の者と思はる。勸懲小説にもおのづから二種の別あり。一を褒誉といひ、一を誹刺といふ。褒誉は仁義礼智等の八行を本として暗に全編の列伝を設け其好意の尊むべく仰ぐべきを示して読者をしておのづからこそ景慕するの念を起さしめて瞑々裡に良道に導かんことを期す。馬琴が仁義八行を列伝として八犬士伝を綴り、智仁勇を人に擬して朝夷奈巡鳥記をあめる、皆この主意に外ならざるべし。誹刺は全く之に反して暴虐非道の行為をのべ、若くは不義不孝の状をあらはし、あるは痴愚の笑ふべきを写し、あるは醜行の恥べきを描きてもて訓誡せんとつとむる者なり。曲亭翁の夢想兵衛の物語、式亭三馬の浮世床、浮世風呂をはじめとして、福内鬼外の戯作類は総じて此類

の物と思はる。さはあれ馬琴の著作の如きは概ね褒誉と誹刺とを兼たり。殊に晩年の作に於ては褒貶自在にもせしものあり。美少年録の如きは其例なり。また誹刺法にも二様ありて厳正なる事馬琴の美少年録の如きものあり。或は滑稽洒落にして一読人を笑はしむる鬼外の戯作に類するものあり。

（小説の種類」、適宜句読点を加え、用字を改めた）  
逍遙の造語と思はれる「勸懲小説」（didactic novel）にはさらに「褒誉」と「誹刺」の二種があり、「福内鬼外」の戯作類は後者の代表であると言ふ。「福内鬼外」は二世をはじめ複数の人物が名乗るが、逍遙は同書の別の箇所で、

近くしては西鶴、其笑、風来、京伝のともがら、前後物語をかきあらはして虚名を一世に博してより小説ますます世に行はれて、世の狂才ある操觚者流は皆争ふて稗史をあらはし、  
（緒言）  
とも記していることから、風来こと平賀源内を指して「福内鬼外」と呼んでいられると思はれる。その福内鬼外の戯作類を勸懲小説として把握して

いることは興味深い問題だが、本稿では逍遙が源内を「福内鬼外」と呼んでいることから稿を起こしたい。

平賀源内にはいくつかの筆名があるが、風来山人と福内鬼外が有名で、その使い分けを、大田南畝は「風来、浄るり本の名前は福内鬼外と称す」(『奴風』)と記し、馬琴も『近世物之本江戸作者部類』で、

火洗布略説、物類品隣といふ二書の著述あり。又伝奇、院本を作るに名高く、この余雑著の戯作多く、浄瑠璃本を作るときは福内鬼外と称し、戯作の小冊には風来山人と号す。実に近世の奇才也。

(「読本作者の部」)

と記している。厳密には源内自身は浄瑠璃作品以外にも福内鬼外を用いているし、戯作者源内を福内鬼外の名で呼んだ例もあるが(石上敏氏『平賀源内の文芸史的位置』、平成十二年、北溟社刊)、その例は少ないので、この南畝や馬琴の区別法はそれなりの一般性を有していると思われる。おおまかに風来山人は戯作の際の筆名、福内鬼外は院本(浄瑠璃本)の際の筆名として認識されていたと思われる。

にも関わらず、逍遙は戯作者平賀源内を「風来」と「福内鬼外」の両様で呼んでいるのである。このことは、坪内逍遙にとって「福内鬼外」の名が「風来」と並んで脳裏に強く焼き付いていたことを物語っている。その逍遙の意識は現在の源内評とはやや乖離しているのではないだろうか。現代にも歌舞伎や浄瑠璃で上演されている『神霊矢口渡』(明和七年正月江戸外記座初演、以下『矢口渡』)にしても研究の立ち後れが指摘できるし、源内をして浄瑠璃作者だとみなす意識は薄いのではないだろうか。まして福内鬼外という筆名からただちに源内の記事を思い起こすことはできないであろう。

だが、見方を変えれば、こと文事に限ってみれば、源内は単著共著含

めて全九作の浄瑠璃作者であって、例えば全集を編めばその三分の二は浄瑠璃作品で占められる「作家」なのである。彼にとっての浄瑠璃の比率は高いと言わざるをえない。

源内にとって浄瑠璃とはいかなるものであったのだろうか。源内や風来ではなく、本稿では浄瑠璃作者「福内鬼外」について考察してみたい(以下、源内と鬼外の両方の表記を用いるが、その使い分けに明瞭な基準があるわけではないことをお断りしておく)。その際に先掲石上敏氏に優れた福内鬼外論があるので、随時参照することもはじめに断っておく。そのうえで、彼の最初の作にして代表作の『矢口渡』について検討し、福内鬼外についていくつかの私見を提示してみたいと思う。

## 1 福内鬼外

水谷不倒翁は、源内の浄瑠璃について、

本草学者より一足飛びの浄瑠璃作者にして、くろ、う、との作者を壓倒す。これを見ても源内が才の非凡なりしを察すべし。

と評した<sup>①</sup>。不倒翁が名作としたのは安永九年三月肥前座初演『靈験宮戸川』である。不倒翁は源内の作風を「千編一律の木匠わくの中にあり」「概して古色を帯べり」「金平の系統を伝へたるもの」と手厳しく批評しながら、「あるひは神田明神、あるひは浅草観音、さては六郷近傍の新田明神などの縁起を説くなど、江戸ッ児のよろこぶところ、作者の如才なきを知るべし」として、右の評が導かれているのである。浄瑠璃作者・福内鬼外評としてはこの不倒翁の言に尽きると思われる。

以後、福内鬼外はどのように評価されているのであろうか。この点は近石春秋氏『操浄瑠璃の研究』(昭和三十六年、風間書房)に詳しい。

氏の説を少し補いながら概観してみる。

肯定的に捉えているものは、早くに馬琴が前掲『近世物之本江戸作者部類』で「浄瑠璃の新作もて一時に都下をさわがしたり」としたのが有名で、若月保治氏も「さすがに江戸作者としての代表者たることを肯かしめるに足る」（昭和十八年、『人形浄瑠璃研究』、桜井書店）と評している。田川邦子氏が「彼を代表的作者と考えるのは疑問」（叢書江戸文庫15『江戸作者浄瑠璃集』、平成元年、国書刊行会）とされるのは、この若月氏などを念頭に置いたものであって、「代表」というのは言い過ぎであつても、それなりの評価は与えるべきと考える論者がいる。他に近石氏の挙げる帝国文庫『風来山人傑作集』（明治二十七年、博文館）序文、佐々政一氏『近世国文学史』（明治四十四年、聚精堂）、雙木園主人『江戸時代戯曲小説通志』（昭和二年、弘文社）がある。その近石氏自身は、

源内の個性が他の作者に真似られない特別なものがあつたがために、その浄瑠璃は他の凡庸の作家には見られないすぐれた点があつた。それはその文章全体に力があふれて行文の極めて流暢に生き生きと称えていることである。

一方、否定的に捉えている代表は「平凡な類型的な構想と趣向とに堕した浄瑠璃」と酷評した黒木勘蔵氏（『浄瑠璃名作集 下』、日本名著全集刊行会編、昭和二十四年）と、

その浄瑠璃に於ては、古人の模倣翻案を敢てしてその足元へもとど、かざる作者であつた。（『浄瑠璃作者の研究』、昭和十九年、東京堂）と評した園田民雄氏である。園田氏は、『矢口渡』の頓兵衛は近松門左衛門『梟狩剣本地』三段目、『源氏大草紙』の朝比奈と熊蔵は『本朝廿

四孝』二段目、『弓勢智勇湊』三段目は近松『津国女夫池』三段目、『靈驗宮戸川』八段目は『大塔宮曦鎧』、十段目は『菅原伝授手習鑑』、『荒魂新田神徳』六段目は『義経千本桜』、それぞれの模倣もしくは剽窃であることを指摘し、「大近松や半二のやうに、真に骨身をけづる思ひをして作つた底の作が一つもない」「第一義的な芸術作品ではない」と断罪している。さらに重友毅氏は「極めて品位の低い野卑」とまで言う（『日本近世文学史』昭和二十五年、岩波書店）。鶴井洋氏「平賀源内の戯曲」（『国文学研究』一 昭和二十四年十月）もその模倣や利用を指弾している。

また批判したわけではないが、鬼外の作品の先行作利用について近石氏が園田説を次のように補足している。

「神靈矢口渡」四段目切 ↓ 「義経千本桜」三段目切、「大塔宮曦鎧」二段目切

「源氏大草紙」三段目切 ↓ 「菅原伝授手習鑑」四段目切  
 「弓勢智勇湊」二段目切 ↓ 「御所桜堀川夜討」二段目中  
 「弓勢智勇湊」二段目切 ↓ 「義経千本桜」二段目切  
 「実生源氏金王桜」二段目切 ↓ 「義経千本桜」三段目切  
 「実生源氏金王桜」三段目切 ↓ 「奥州安達原」三段目切  
 「嫩榕葉相生源氏」第二段 ↓ 「御所桜堀川夜討」二段目切  
 「前太平記古跡鑑」第五 ↓ 「艶容女舞衣」酒屋の段  
 「忠臣伊呂波実記」各段 ↓ 「仮名手本忠臣蔵」の各段  
 「荒御霊新田神徳」第三 ↓ 「三莊太夫五人嬢」一段目  
 「荒御霊新田神徳」第六 ↓ 「義経千本桜」三段目切  
 「靈驗宮戸川」第五 ↓ 「一谷嫩軍記」三段目切  
 「靈驗宮戸川」第六 ↓ 「義経千本桜」三段目切

これらの延長線上に城福勇氏の福内鬼外論がある。氏は、源内の生育環境において「本場の義太夫一座に接する機会」があったこと、鬼外が幼少の頃から『太平記』『三楠実録』を耽読したことから、軍記物の系譜に属する古風な義太夫浄瑠璃に筆を染めるに至ると説かれている。

城福氏の立論上の欠点は『太平記』『三楠実録』の扱いであろう。鬼外に限らず近世中期の作者たちの読書量と範囲はきわめて多く広い。城福氏の解釈では、鬼外は『太平記』と『三楠実録』を耽読していたと受け止められるが、氏の拠られた資料は次の文章である（傍線筆者、適宜、句読点濁点を施した）。

吾幼年にて太平記と楠実録をこのみて昼夜をわかず読けるが、藤房の卿、楠廷尉の忠臣、貞實文武謀略、実に古今に冠たるも、暗君に仕へて如何ともすることなし。その所に至ては書を捨て拳をにぎり齒がみをなして憤る事度々なりしが、夫よりして天然自然主人といふ名にあいそつきて、今永々の浪人者不了見の基となりけらし。（中略）我が知恵の分限相応、国家の器を工夫せんと思ひ立ちはたちながら、それさへも心にまかせず。

この短文は末尾に「国家の器を工夫せんと思ひ立ちはたちながら、それさへも心にまかせず」とあるように自身の不遇を託つものである。『太平記』と『三楠実録』もその文脈で解釈すべきで、幼年にこの二書を読んでは、傍線部のように暗君によって忠臣が無駄死にする矛盾に憤り、その体験が今の浪人という選択の基礎となったというにすぎない。「自然、主人といふ名にあいそつきて」という源内の幼児体験を語るための逸話であって、源内が幼年に『太平記』『三楠実録』しか読まなかったとか、それが彼の読書の中心であったとは語っていないことは明白であ

る。当然、源内は古今和漢洋、白話小説から万葉集まで眼をさらしていたのであって、それらすべてが彼の書く浄瑠璃の母胎となっているのである。まして義太夫浄瑠璃を「軍記物の系譜」とするとか、『太平記』『三楠実録』が源内の時代浄瑠璃の母胎となるとかの論議は、浄瑠璃の側からも源内の側からも噴飯ものの把握であろう。

それ以外の城福氏の整理は概ね妥当である。以下、簡単に総括する。『矢口渡』跋文にあるように、源内の執筆には吉田冠子（二代目文三郎）の勧めがあり、冠子は「指導・助言し、補筆もした」とされている。以後、いくつかの単独作は認められるが合作が多い。その他の補助者として、森島中良と大田南畝が考えられる。先行浄瑠璃作品の模倣が多いが、新しい「当たりそふな趣向」（「根南志具佐」）が鏤められ、本草・医学用語が多く、阿蘭陀趣味も見られる。題材は江戸やその近郊が多く、歌舞伎や「笠森おせん」、土平餅などの江戸名物を取り入れ、吉原の記述が多く、江戸言葉や地口を盛り込んでいる。それら「主として生活費の補助を得る」ために、「筋立て・趣向はもとより、文辞の末にいたるまで、観客である江戸者の思惑を考慮に入れ、彼らの人気に投ずるように仕組まれた」と纏められている。これが氏の福内鬼外論の基本である。そのうえで、氏は源内の浄瑠璃の特徴として次の四点を挙げる。

- 一 恋慕と茶利の場面が多い。
- 二 行文流麗、悪く言えば口達者である。
- 三 洒落本ないし黄表紙的な要素も見受けられる。
- 四 人形浄瑠璃の歌舞伎化を推し進めた。

氏の整理は、科学的な総合平賀源内論が待望されている中で、おもに歴史学の立場からこの福内鬼外論が構想されたと考えられる。しかし、そうであるがゆえにその大雑把な把握にある程度の問題が含まれてお



り、歴史学ではなく福内鬼外論として再考することが求められている。城福氏の業績には敬意を払いつつも、やはり綿密な考証の下にこの雑駁な説を乗り越えていく必要がある。

城福説の立つところは、「浄瑠璃は彼の遊びであり、戯れであった」「浄瑠璃を作るといふことは、少しは面映ゆい種類の遊び」といった評価の散見から推測できるように、浄瑠璃は源内の本領ではない、というものである。源内の本領は本草学であり、武家社会であり、浄瑠璃界は「多少の小遣いもうけ」の場であったと言っているのである。しかしながら、作品分析について認められた考証力とはうらはらに、その作者論を裏付ける資料を実は氏は提示できていない。氏の言葉を借りれば、こと浄瑠璃に関していえば、まさに氏は「行文流麗、悪く言えば口達者」で、氏のイメージする出来上がった福内鬼外論の結論が先にあり、あとはそれに沿うように文章を連ねているにすぎないと思われる。

そこで、いま一度源内の言葉を検証しながら、彼にとつての浄瑠璃とは何であるのかを考察してみたい。浄瑠璃作者・鬼外の姿は『平賀源内全集補遺 一』所収の佐々木昌興氏蔵文書から垣間見ることができ（用字は適宜改めた）。

今宮は虫ところなり。聾なりとは耳の穴の明さるを笑ひたる詞なり。されは虫にかきらす、駒鳥、うつら、ひばり、鶯の類好（む）人は百金をおしまされとも、耳の明さる人は雀も同じ思ひなり。殊更詩歌発句の目に見えぬ鬼神を哀（れ）と思せるも、耳明さる人は流行歌ほどに面白からず。予、戯（れ）に浄瑠璃を書（く）ことをこのみ、今年初春の遊びに靈驗宮戸川といへるを十一段につゞりける。第三段目より十段目迄十場は、肥前座の太夫にわりて、咽と声がらを考（へ）て書（き）置けるを、池永亀州丈のたのみにて、彼

(の)座の人五六人に読（み）聞せけるを、竹伊勢壽楽つくく聞（き）て、試に役割をしけるに、予か心当の通り一場も違（は）さること割符を合せたるか如し。さりとは不思議の事ともなり。此人若き頃は此道繁昌の時にて名人も多かりし故、自然と其余風なりけると昔恋しくそ覚えける。及はすなから近松氏の教をたかへしと、我筆力に心あれば、彼（の）人の耳に妙なり、千人の盲、万人の聾より、この人一人に聞（か）れたるは、我本望の至りなれば、最早この浄瑠璃世の人に聞（か）するにも及はすと、歡（び）のあまりいささかの品を贈るとて、此事をしるし侍る。

安永七年いぬ如月五日

福内鬼外誌

傍線部のように「戯れ」とはいいなながら、肥前座の太夫の「咽」と「声柄」を考慮して作曲したという。しかも、世間一般には理解されずとも竹伊勢壽楽のような名人に認められればそれでよい、という殊勝な物言いをしている。城福氏は情報を操作してこの文章から「戯れに」だけを強調し、前述の「戯れ」という結論に強引に導かれるわけだが、この文章を偏見なく読む限りでは、とても城福氏のいうような「遊び」とは読み取れない。むしろ「遊び」の範疇を超えた、浄瑠璃作者・鬼外の熱意と真摯な姿が認められるだけである。

その観点から、この文章を検討する時、「及ばずながら近松氏の教えを違えじ」という一節がおのずと注目される。鬼外が近松門左衛門に言及するのはこの一度だけではない。

近松老翁世を戯場に辟（さけ）て、数の浄瑠璃を作けるに、筑後、播磨の名人有（あ）つて普く世上に行（な）り、勸善懲惡の世を教（し）めるの、一助たる事、是近松氏の本心なり。中頃、千前軒文耕堂が類も亦近松氏の意を請（う）けて、作れる所正（た）しければ此道甚盛なりしが、いつの頃よりか衰（おとろ）へ、

今時の作者は固（もとより）そこ所ではなく、文法（ぶんぽう）をしらず、手尔（わら）於葉（ま）を弁（わ）へず、嘲（あざわら）を遠近（とんじん）に伝（つた）へ、耻（はぢ）を千歳（せんさい）に残（のこ）す。

（亥のとし卯月上旬（安永八年）『荒御霊新田神徳』後序）

鬼外によれば、近松は劇場に隠遁し、竹本筑後掾や播磨掾の名人との組み合わせも奏功し、世上に流行したが、その本心は勸善懲悪であったという。その後、千前軒や文耕堂が続いたが今の作者は墮落したというのである。鬼外にとつては近松はこのような存在であつて、城福氏もこの部分は「敬重してやまなかつた門左衛門とその作品」とされている。ここで、鬼外が自身を近松―千前軒・文耕堂の系譜に位置づけている点には注意してよいであろう。さらに、

評議さらに一決せざりし處に、近松氏の祖、思兼神進み出て宣ひけるは、

已に賢るのむだ書に浄瑠璃や小説が当れば、近松門左衛門・自笑・其磧が類と心得、

（安永六年『放屁論後編』）  
金になる気でやり付たら、剣術者ならば僧正坊、学問ならば文宣王、役者は海老蔵、作者は近松、昔の人の上を越し、四海に溢る、高名には、自と富貴自在にて、身代ずつしりあた、まる。

（安永八年『金の生木』）

というように、たびたび近松に触れている。

作品についても、『矢口渡』が近松『梟狩剣本地』、『弓勢智勇湊』が近松『津国女夫池』を利用したことは先述の通りである。加えて、『忠臣伊呂波実記』も近松の『国姓爺合戦』を利用した箇所がある。この現象を「利用」といった安易な作劇方法と捉えるか、近松へのオマージュと取るのかは議論の分かれるところではあるが、この点も鬼外の近松への言説に即して改めて考えるべき課題であろうと思われる。ただ、石上

敏氏が「西の近松に対して東の鬼外とは、現在から見てこそバランスを欠くようであるが、先述の通り、ある意味では決して不自然な並称ではなかつた」と指摘される当代の評価は見落とされてはならないであろう。すなわち、

又問、仏も本は凡夫といひ、富貴の本は金にあり、金の本は土なり、から鉄炮をはなすにも本のない事はいひにくし。

答曰、善哉、問こと。詩文章は滄溟弇州と傲然に、倭歌は古今万葉と幽玄し。宋学は屁をひつて理屈をつけ、古文辞は秦漢以上と嬉しがる。極意伝授の巻物に元祖の思ひつきを書き残し、神楽巫女の芸尽に天の岩般戸の余風あり。（中略）春狂言の新しきも曾我をたてにし、福内氏の戯作も近松が準繩を出す。

（安永五年『風俗問答』）

という、鬼外が近松の系譜を引くとするものである。これは、石上氏も用例として挙げられた、

近松福内が綴り劇、本は操芝居にて用ひ、桜田並木が作し正本は歌舞伎の劇場にて控。

（享和二年『青楼娼言解』）  
若此上にもお望ならば、三八の日を定めて、近松が院本を講じ、風来が狂文を論すべき歟。夫も可笑くて茶なるべし。

（文化八年『客者評判記』）

というような源内没後にも続く扱えられ方であつた。源内が近松と並称されるその源は、ほかならぬ源内自身の言説から発せられていると思われるのである。近松と鬼外については、次の近石泰秋氏の優れた評価（先掲『操浄瑠璃の研究』）を以て、拙考の代弁とさせていただきます。

場面々々の描写がすぐれてゐると、単純であるにしても趣向の駆使においては極めて確かな所があるので、この時代の一流の作者と

して何等遜色はない。ただ我々は平賀源内の各方面に分散させたあの才能をどれか一つに、たとへば浄瑠璃の方面に統一させて、それに生涯をかけさせたならばどうであつたかと考へてみるのである。恐らくは近松が浄瑠璃史上に残した業績に比較し得るものが出来たのではないだろうか。

また、水谷不倒翁以来の説で、「この平賀源内が福内鬼外の戯号を用ひたのは、紀上太郎の勧めによつたのである」（園田民雄『浄瑠璃作者の研究』）という紀上太郎との関係は後考に期ししたいと思う。

## 2 『神靈矢口渡』

杉山其日庵『浄瑠璃素人講釈』には次のようである。<sup>(1)</sup>

往昔よりこの段は、三味線弾などが、何の味もない雑用な譜が付けてあると軽蔑すけれども、それが大間違である。その何でも無い所に、深い深い云うに云われぬ力の入る修行が必要になるのである。それが即ち住太夫風である。（中略）即ちこの「矢口」のような物は、きつとその風を弁えて修行すれば、三味線弾も太夫もその風を習得する好材料であると思う。（『神靈矢口渡 頓兵衛内の段』）

其日庵は「○○風」に拘るのだが、彼によれば「矢口渡」の「頓兵衛内の段」は住太夫風の習得の好材料であるという。作品内容ではなく、その音楽性について言及した数少ない指摘の一つである。源内自身も『矢口渡』には自信があつたようで、「義太夫節の長き事も、忠臣蔵・矢口渡は望み次第」（安永三年『放屁論』）とあつて、義太夫節の代表作『仮名手本忠臣蔵』と並べてみせている。その自信を支えてくれていたのが竹本住太夫が『矢口渡』三段目切と四段目切を語つたことであつたよう

で、同じ『放屁論』に「住太夫は葺屋町に義太夫節の骨髓を語る」として住太夫を称えている。住太夫については中村幸彦氏の解説を引いておく。<sup>(2)</sup>

田中文蔵。屋号丸屋。二代目竹本政太夫門。しばしば江戸に下り、石町に住み、石町の親玉（執心録）とうたわれた名人。文化七年没（浄瑠璃大系図など）。評判鶯宿梅に「過ぎし矢口の三の切もあたりはづさず」。執心録に「矢口新浄瑠璃三四とも大当り（中略）、其次が矢口渡益く大当り、今にも抜本にて御存じ住太夫大手柄なり」などあつて、この後、矢口渡を得意とした。

其日庵の『矢口渡』評価は住太夫の語りにとどまらず、

即ち、平賀流の文才名筆になる「コレイナア、コレ、こちら向いて下さんせと、右よ左と付け廻す、琥珀の塵や磁石の針、粹も無粹も一様に、迷ふが上の迷なり」と書捨て、また、「なんば田舎生まれでも、惚たが因果惚れられたが、不肖と思つて下さんせ」「ハル、サワリ」となつて「日影の木々も花咲けば、岩のはさまの溜り水、月も宿る（清めば住む世、ともある）を思ひ出に叶へてやらうとつい一口、云ふてくれたがよいわいなと、縋り付いたる袖袂、さはらで落る玉笹の、あられもないが恋路なり」と何の屈托もなく書き運んだ名文に、付けてある譜はまたサラサラとして何の屈托もなく、全く文章に負けぬ力がある譜と思わるるのである。かくの如き力ある物を、非力の三味線弾や太夫が馬鹿にして、トウトウ世に流行らぬようにしてしようたとは、何たる嘆かわしい事であろう。

（『神靈矢口渡 頓兵衛内の段』）  
として、源内の「名文」についても言及している。この「名文」については、南畝『奴風』に「矢口渡の名文は、忠臣義士のためなみだ、天に

通せばあまの川、つゝみもきれて流るらむ、といふ文句を自讃せり」(『奴風』)とあって、源内自身は三段目切の方を自画自賛していたようである。其日庵は、

コレイナア、コレ、こちら向いて下さんと、右よ左と付け廻す、琥珀の塵や磁石の針、粹も無粹も一様に、迷ふが上の迷なり。

という四段目切の一節以下を「文才名筆」として評価するのだが、この琥珀うんぬんの文辞についてまず問題としたい。この文辞については、やはり南畝が『奴風』で、

琥珀のちりや磁石の針、粹も不粹も一様に、迷ふが上のまよひ也、といふ文句は、例の物類品隲の余習いまだぬけず、旧癖のおこりたるもをかし。

と評したことがよく知られている。そのため、この一節については従来しばしば言及されている。文中の『物類品隲』が源内の本草学における代表的著書なので、南畝が「余習いまだぬけず」と言うからには、この琥珀うんぬんの記事は本草書に拠るのであると安易に考えがちである。ここを捉えて城福勇氏は「本草趣味」と評し、中村幸彦氏は『大和本草』と『和漢三才図会』をもって注釈を試みている。確かに源内の浄瑠璃作品には城福氏が指摘するように「本草趣味」による文辞が散見している。しかしながら、この琥珀うんぬんの文辞を「本草趣味」と断じるには、まずその出典を明らかにする必要がある。この出典は蘇東坡の『物類相感志』「磁石引針」琥珀拾芥(総論)である。源内は『根無草後編』(明和六年)二巻にも「それ造化のかぎりなき、小見を以てはかるべからず」として、「千変万化のかぎりなき、張華も博物の看板をおろし、東坡も相関志の店をたたむ」と蘇東坡『物類相感志』を引いている。蘇東坡『物類相感志』は彼のお気に入りであったのである。こ

の点をまず指摘しておきたい。

蘇東坡と『物類相感志』をどのように考えるかは議論の分かれるところであるが、本草書や医学書だと断定するには抵抗のあることは事実であろう。従来、この有名な一節は、南畝の言にも引かれて、いかにも科学者(本草学者)源内の文章であるというような安易な福内鬼外論が説かれる原因となっている。その典拠が蘇東坡『物類相感志』であることが判明した今、その安易な科学者うんぬんの鬼外論は修正が求められるよう。

ついで、従来ひそかに語られていることは、鬼外が『矢口渡』を執筆した理由である。

明治十三年に平賀源内の百年忌が高松で行われた。その際に編まれた『闡幽編』に、

○武州矢口渡、有「新田義興祠」、称「新田八幡」、無「人」祭賽、堂宇荒廢、祠官憂<sup>レ</sup>之「一日謀<sup>ル</sup>之」翁曰、是易々耳。即作「院本」、堂曰「神靈矢口渡」、以与<sup>レ</sup>之、既而子女争賽、神威輝赫四方、堂宇改<sup>メ</sup>觀云

と記される。新田神社が荒廢していたので、その祠官に頼まれ、源内が『矢口渡』を書いたところ大当たりしたので、以後、新田神社は隆盛を取り戻したという。この逸話は何に拠ったのか不明である。江戸から遠く離れ、百年以上前の事跡、しかも源内を称えるという特別な状況で編まれた『闡幽編』という配り本に記されたこの説は、あるいは当時の希望的巷説を採録したにすぎないかもしれない。同時代証言である、秩父中津川幸島家の逗留中に書かれたとする「鉾山日誌」の方が信憑性が高いような気もする。にも関わらず、この逸話が時には事実であるかのようにな説かれることがある。水谷不倒翁『平賀源内』より引用する。



源内がはじめこの作を案出せしは、かねて新田神社の祠官は源内と親しかりしが、一日祠官源内にいへるは、本廟は南朝の忠臣新田義興ぬしを祭れるにて、神靈殊に炳焉たれども、世に知る人なきため、近來堂宇廢類し、誰れ詣づる者なきを、何卒して神威のほどを知らしめんと願ふが、足下にも我が志を助け給へ、と懇ろに頼みけるを、源内そは安きことなり、我に一策あり、待ち給へとて別れしが、不日にして『神靈矢口渡』の出来、幸ひにして流行せしたため、俳優・芸妓等を初め、大方の人さへかの所に参詣し、さすがに荒れにし社殿も、たちまち修復するを得たりといふ。

不倒翁に先立ち関根正直氏『小説史稿』（明治二十三年、金港堂刊）にもほぼ同文が載るので、不倒翁は関根正直氏の説を採録されたのかも知れないが、その淵源は『闇幽編』の可能性がある。これについては、饗庭篁村氏に反論があるが、とにかく、関根正直氏、水谷不倒翁という江戸碩学の支持を受けて、このいかにもという逸話が市民権を得たようである。そして、後には例えば進藤義明氏『平賀源内』（高山書院、昭和十八年）にも説かれ、現在もちろはらと目にする逸話となった。しかし、これは石上敏氏が説かれるような後に付与された「評価の変遷」であつて、源内の『矢口渡』執筆理由とするには慎重にならざるを得ない。ところで、鬼外が自作の浄瑠璃に郷里の風景を描いていることは意外と問題にされていない。源内の出身地は讃岐志度、八島古合戦場のほんの近く「志度合戦」のあつた場所である。平家が陣取つた志度寺は源内の生家と目の鼻の先にある。源内が志度を描いた作品は『弓勢智勇湊』（明和八年）四段目である。

隙行<sup>てふ</sup>駒の足早く元暦<sup>げんりやく</sup>二年弥生の空。春めく野邊の、花曇<sup>くもり</sup>飛かふ蝶の、牟礼高松<sup>のどけ</sup>長閑き、景色引<sup>けしき</sup>かへて源平互に立別れ、けふ矢

合<sup>あ</sup>の八嶋の戦<sup>いくさ</sup>、入<sup>い</sup>江を隔<sup>へだ</sup>一<sup>いっ</sup>構<sup>かま</sup>へ要害<sup>ようがい</sup>の地を瓜生<sup>うりな</sup>が岡、義経公の陣所<sup>ちんじよ</sup>には、去年の秋より人質<sup>にんしつ</sup>の、建礼門院<sup>けんれいもんゐん</sup>傳<sup>つた</sup>て饗<sup>きやう</sup>応<sup>おう</sup>愚<sup>ぐ</sup>もなかりけり。

「牟礼高松」「八嶋」は『平家物語』に名が見える。「瓜生が岡」は『吾妻鏡』『源平盛衰記』に名が見える。これぐらいの地名は、別に讃岐志度出身でなくても知っている範囲であろうか。瓜生が岡を八嶋と「入江を隔つ」と書けるのは現地を知っている人間にこそ可能と言つてしまふのは我田引水のそしりを受けよう。では例を重ねよう。続く「春霞八嶋ノ儀」の次の箇所はいかがであろうか。

義経五位<sup>ご</sup>に至る時此馬に乗たる故、太夫黒と号<sup>なづ</sup>しを次信兼ねて望<sup>ま</sup>しかど、朋輩<sup>ほうばい</sup>の憎<sup>にく</sup>を思ひ是迄はあたへざりしが、冥途<sup>めいど</sup>の旅の餞<sup>はなむけ</sup>別<sup>わか</sup>れ引せ給へば。ハ、ハット忠信信夫が有<sup>あ</sup>りた涙。並居<sup>なみ</sup>る軍兵此君に、命を捨<sup>す</sup>けるは惜<sup>おし</sup>からじと感<sup>かん</sup>じ入<sup>い</sup>たる御仁<sup>ごにん</sup>徳、讃州牟礼<sup>さんしゅうむれ</sup>の大墓<sup>おほ</sup>に、石の印<sup>いん</sup>の朽<sup>くち</sup>やらぬ、勇士の塚<sup>つか</sup>に並<sup>な</sup>たる馬の墓<sup>かぶ</sup>迎<sup>むか</sup>隠<sup>かく</sup>れなし。

佐藤次信（継信）の最後と太夫黒の話は『平家物語』でよく知られているが、佐藤次信の墓および太夫黒の馬墳が牟礼にあることは、果たして誰もが有し得る知識として処理してよいのであろうか。というのは、次信墓と馬墳は、『讃岐国名所図会』（嘉永七年）に「寛文二十年、国祖源英公この墓および馬の墓をも建てさせたまふ」とあり、『金比羅参詣名所図会』（弘化三年）にも「時に寛永二十年癸未夏、邦君これを憐みたまひ、この所に碑をたてさせたまふとぞ」とあるので、基本的には中世以前の軍記には記されるはずがないものである。平家に題材を採る近世の文芸は多いので、そこには次信墓と太夫黒馬墳が語られ、当時ではよく知られていたという強弁も成り立つので断定は避けるが、これは「地元人」源内であれば容易に書ける内容であつたことだけは異論がな

からう。さらにもう一例として、

爰の山々かしこの谷々、一度に燈す松明は、宇治の川邊の螢火もかくやと計り義経の、敵の英氣を取り挫智謀は今に云伝へ、八栗が嶽の山統源氏が峯と名に高し。

を検討したい。この「八栗が嶽」の山統きの「源氏が峯」で義経が松明を掲げて敵を圧倒したらしいのだが、この逸話がよくわからない。『讚岐国名所図会』には、

八栗山続きにあり。元暦二年源平合戦のとき、源義経主この峯に登り、兩陣の氣を望みし所なり。今義経の腰掛石といへるあり、人この石にかくれば災ありといへり。

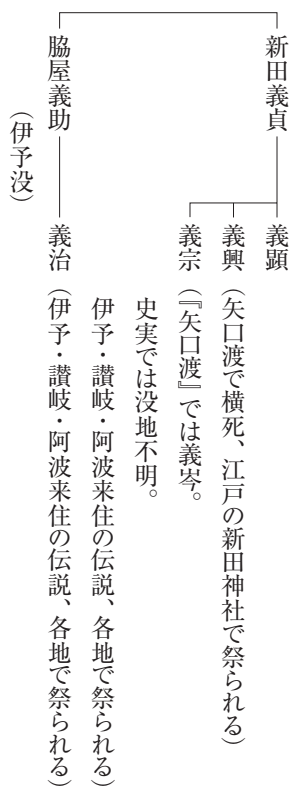
とあるのみである。志度の海を臨む「源氏が峯」は地元なら誰もが知る場所であるが、いくつかの地名辞典類を繕いても、腰掛け石の逸話は見えるが、源内描く松明譚は見つけられなかった。本当に当時から「名に高し」であったのだろうか。ここでも源内の時代には「名に高し」であったが、すぐに忘れられて弘化三年の『讚岐国名所図会』時には記されなかった、もしくは同書に書き留められなかったという強弁も成立しようが、ここは現地を知る源内の創作、もしくは「地元」に伝わる巷説を彼が取り入れたと素直に見る方が自然であろう。

以上、「牟礼高松」「瓜生が岡」「佐藤次信墓」「太夫黒馬墳」「八栗が嶽」「源氏が峯」の列挙は、讚岐人だからこそと言いたいわけだが、やはり我が田に水を引いているのかもしれない。そのお叱りを覚悟の上で、『弓勢智勇湊』の四段目は、江戸にいなながら、子どもの頃に駆け回った故郷を思いながら筆を執ったのではないかという仮説を提示しておきたい。それは、讚岐人の魂を売り渡すかのように江戸人に迎合し、江戸を舞台にしたという従来の福内鬼外論に根本的な修正を求めるものである。

話が逸れたようだが、要は源内が自作の浄瑠璃に故郷の風景を書き込んだ可能性を確認したかったのである。その確認の狙いは『矢口渡』とどういういかにも江戸を舞台にした江戸浄瑠璃に於いても、源内は同様の意識があるのではないか、ということである。

言うまでもなく『矢口渡』は新田義興の矢口渡での非業の死を扱ったもので、新田神社縁起と関係が深い。ゆえに、先の『聞幽編』、関根正直氏、水谷不倒翁の説く逸話が真実を有するのである。しかし、ここに源内の故郷の風景を持ち込みたい。

江戸っ子には想像もつかないだろうが、阿波、伊予、讚岐には多くの「新田神社」がある。<sup>9)</sup>多くは新田義宗と脇屋（新田）義治を祭神とするものである。新田義宗は義貞の子ども、脇屋義治は義貞の弟脇屋義助の子どもである。この新田義宗と脇屋義治、もしくは脇屋義助が四国に来住したという言い伝えが各地にあるのである。有名なものでは愛媛県今治市国分寺脇にある脇屋義助墓で、元禄二年に江島為信が縁起を書いている。<sup>10)</sup>関係図を示す。



当然ながら源内も「先祖の名折れ、家の恥、父義貞、伯父義助」と義興に言わせているので、右の関係図は頭に入っていたはずである。次

る問題は、源内の脳裏にはこの関係図しか入っていなかったのか、それとも讃岐における新田信仰や新田神社も浮かんでいたのかどうかである。讃岐の新田神社の知名度については、『讃岐国名勝図会』に「脇屋義治の墓」が記されることに加え、次の現代の辞書である『神社辞典』（東京堂出版、昭和五十四年）が参考となる（傍線筆者）。

別に新田一族を縁故の地に祀り、新田神社を社名とするものに、次の三社がある。

▼群馬県太田市金山町。旧県社。祭神は新田義貞。（以下略）

▼東京都大田区矢口（旧武蔵国荏原郡矢口村）。旧府社。祭神は新田義興（義貞の次男）。義興は父・義貞の戦死後も、南朝方の武将として東国で活躍した。（以下略）

▼香川県三豊郡高瀬町。旧郷社。新田義貞とその二男義興を祀る。（以下略）

伊予や阿波の新田神社関係者には不本意であろうが、この辞典では三新田神社は群馬県太田市、東京矢口、そして香川県三豊とされている。常識的に考えて讃岐人がこの知名の新田神社を承知していないとは思われないので、源内が『矢口渡』を構想した際には讃岐の新田信仰が頭に浮かんでいたはずである。これは江戸っ子の志向とは全く関係がなく、讃岐人の発想である。というより、讃岐人が江戸に来たからといってただちに故郷を捨て去る筈もなく、またその必要性もないであろう。眼前の江戸の文化を楽しむつつ、そこにおのずと故郷の風景が重なり融和するのは当たり前のことである。源内がいかに「お江戸」の戯作である『放屁論』に「讃岐の行脚無二坊、神田の寓居に筆を採る」と記すのはその意識の典型的な表れである。先述のように「筋立て・趣向はもとより、文辞の末にいたるまで、観客である江戸者の思惑を考慮に入れ、彼

らの人気に投ずるように仕組まれた」と決めつける城福勇氏の福内鬼外論は修正が求められるべきである。

逆に考えれば、水谷不倒翁が説くような新田神社荒廃の事実が仮にあったとすれば、その再興を目論む着想を持ち得たのは、子どもの頃から新田信仰に慣れ親しんだ讃岐人であるからこそと言えるのかもしれない。また、四国には義興ではなく、『矢口渡』の中心人物である義岑（義宗）を祭神とする新田神社も多くある。『矢口渡』の義岑への着目との関係も気になる所である。ともあれ、江戸に出たからといってただちに故郷を忘れて江戸人に迎合したかのような、軽佻浮薄で故郷愛もない人間味の感じられない福内鬼外論については見直しを求めたいと思う。

以上、本稿では従来の説を整理して新たな福内鬼外論を構築することを目論んだものである。その過程でまず『矢口渡』の「琥珀のちりや磁石の針」という有名な一節が、本草学者や科学者というには少し抵抗のある蘇東坡『物類相関志』を典拠とすることを指摘した。また『弓勢智勇湊』四段目には源内の故郷の風景が描かれている可能性を指摘し、『矢口渡』執筆に際して、その契機の一つに四国に於ける新田信仰を見るべきだという案を提示した。これらの積み重ねから福内鬼外論を再構築したいと思う。

#### 【注】

- (1) 『偉人史叢 第六巻 平賀源内』（明治二十九年、裳華房発行）
- (2) 『平賀源内の研究』（昭和五十一年、創元社）
- (3) 『平賀源内全集 補遺二』（昭和十四年）所収林三郎氏蔵短文。
- (4) 初出、大正十四年五月『黒白』九一号。引用は岩波文庫に拠った。

- (5) 『日本古典文学大系55 風来山人集』(昭和三十六年、岩波書店) 頭注。
- (6) 人物叢書『平賀源内』(吉川弘文館、昭和六十一年)
- (7) 注(5)。
- (8) 年代が『讃岐国名所図会』では寛文二十年、『金比羅参詣名所図会』では、寛永二十年癸未夏と異なるが、ともに昭和五十六年角川書店『日本名所風俗図会』14「四国の巻」に拠る。
- (9) 『脇町史』上巻(平成十一年)に「脇町だけではなく、特に美馬郡・三好郡には、新田義貞・義宗・義助・義治を祭神とする新田神社が多く点在し」、「江戸時代から新田義宗・義治の阿波来住を説く伝説が流布されていた」とある。『愛媛県神社誌』(愛媛県神社庁、昭和四十九年)に「新田義貞公をはじめ、その御子息義顕公・義興公・義宗公、その御舎弟脇屋義助公と御子息義治公の等の御神徳を慕うて齋きまつった神社が県内に二七社(うち一三社の境内社)ある」とある。
- (10) 下坂憲子氏「愛媛初の小説家―今治・江島為信」(『えひめ 知の創造 愛媛大学の挑戦』、平成十九年、愛媛新聞社)、『江島家文書』『永野文庫』目録(愛媛大学附属図書館編、平成十四年)